

事業名称	都市のカルチュラル・ナラティブ in 港区： 大学ミュージアムを核とする地域文化資源の連携・国際発信・人材育成事業		
実行委員会	「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト実行委員会		
中核館	慶應義塾大学 アート・センター		
	住所	〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45	
	TEL	03-5427-1621	FAX 03-5427-1620
	ホームページ	http://art-c.keio.ac.jp/-/artefact	
構成団体	公益財団法人 味の素の文化センター NHK 放送博物館／NHK 放送文化研究所 NPO 法人 Japan Cultural Research Institute 曹洞宗 萬松山 泉岳寺 一般財団法人 草月会 大本山 増上寺 株式会社 虎屋 虎屋文庫		
事業開始時点 の課題分析	<p>現代文化の発信地、大使館が多く立地する国際都市として知られる港区は、同時に、江戸時代から続く寺社や史跡、そして歴史ある企業が所在する歴史文化都市でもある。すなわち、近世から続く伝統文化と現代文化の豊かな現場が、国際的な環境の中に同時に存在することが、港区という都市の大きな文化的特徴と言える。</p> <p>中核館である慶應義塾大学アート・センターは、150 年前より港区に所在する慶應義塾大学のミュージアムだが、同時に日本の現代芸術の研究所でもあり、近年の大学によるスーパー・グローバル事業の推進とも連携して、日本文化に関心を持つ国内外からの来訪者や、他校所属も含めた留学生を数多く受け入れている。</p> <p>留学生や来訪者と接する中で明らかになったのが、【伝統文化と現代文化に二極化した文化に対する関心】、【国際的なコミュニティへの情報不達】という課題である。</p> <p>あえて単純化するならば、伝統文化に関心をもつ人々は現代美術作品の前を素通りし、現代美術の観客たちは寺社に足を踏み入れない。伝統文化と現代文化が同じ場所で展開するとき、その底流には両者に共有の文化の物語(カルチュラル・ナラティブ)があり、互いに影響を与えあっている。だが、この2つの文化の魅力的連関は、解説なく見いだすのが難しい面があり、とくに外国からの来訪者にとっては、決して自明なものではない。</p> <p>一方で、港区における既存の発信・連携に関わる活動は、イベントの広報活動が中心となっており、個々のイベントを繋ぐ歴史・文化的な文脈を示す試みはなされていない。文化資源の背後にある文脈は、学術研究活動を通じて明らかにされているが、学術活動の成果は専門学術誌や学会等を通じて流通することがもっぱらであり、残念ながら一般からの利用に開かれていないと言いがたい。</p> <p>また、区内の芸術文化を紹介するポータル「MINATO ART NAVI」の提供が日本語のみであり、多言語対応を機械翻訳に依っていることから読み取れるように、国際的なコミュニティに対する発信にも課題が残る。</p> <p>以上の現状分析を踏まえ、本事業では、港区で展開する過去と現在を往還するダイナミックな都市文化をあらゆる人が享受できる環境の実現を目指し、【学術成果を活用した都市文化の過去と現在をつなぐ物語の提示】、【国際的なコミュニティへの発信】、【これらの活動を担う国際的文化人材の育成】の3点を取り組むべき課題としてとらえる。</p>		
事業目的	<p>① 大学や地域の文化機関が蓄積する学術成果の活用を通じて、「都市文化の物語」を提示し、伝統芸術に関わる文化と、現代芸術に関わる文化を相互に接続する。</p> <p>② 地域の文化機関や企業と連携し、有形・無形の文化資源のさらなる活用を進めるとともに、「くらしの文化」等これまで認知度の高くなかった文化資源を顕在化する。</p> <p>③ 文化資源や文化資源を巡る活動のサステナブルな国際発信・連携を実践する。</p> <p>④ 大学の人的リソースを活用し、地域の文化資源の国際発信を担う人材を育成する。</p> <p>本プロジェクトでは、これらの活動を通して、大学ミュージアムを地域の核とした、領域横断的な地域文化資源の活性化モデル構築を図ることによって、現代・将来の芸術文化活動を支え、文化観光を深化させ、さらに、日本の文化に寄せられる国際的な関心に対応することを目指す。</p>		

<p>事業概要</p>	<p>本事業のプロジェクトチームは、「現代性と歴史性」「国際性」「多様性」「学術性」のそれぞれの面で秀でた特徴をもつ港区内の博物館、企業、NPO、寺院等の文化団体によって組織される。NHK 放送博物館(放送文化)、味の素の文化センター(食文化)、虎屋(和菓子文化)、JCRI(画廊史)、泉岳寺(禅文化)、増上寺(江戸の寺院文化)、草月会(いけばなと前衛芸術)、慶應義塾大学アート・センター(現代芸術)ら、学術活動を背景にした多様な専門性をもつチーム・メンバーが、中核館の主導のもと、一連の活動モデルの構築および実践を行う。本事業の活動は「調査・育成」分野と「成果・発信」分野の2分野に大別される。</p> <p>「調査・育成」分野</p> <p>1. 地域文化資源の調査 これまで活用が進んでいなかった、地域文化資源の調査を行い、歴史・文化的文脈と接続する</p> <p>2. 情報発信の手法に関する調査・検討 オンラインやモバイルアプリを利用した情報発信の手法に関して、国内外の事例調査、先行事例のヒアリング等により調査を行い、地域特性にふさわしい情報発信のあり方の検討を行う。</p> <p>3. 国際発信を担う人材育成プログラムの開発 留学生・学生を対象に、地域文化の国際発信を担う人材育成プログラムを開発、実践する。</p> <p>「成果発信」分野</p> <p>1. 港区で展開する都市文化をその歴史・文化的文脈とともに紹介するイベントの開催 学術成果を活用し、多様な文化資源を紹介する講演会、ガイドツアー、展覧会等を開催する。</p> <p>2. サステイナブルかつ国際的な情報発信 イベント等の活動成果をサステイナブルに活用し、国際発信・連携するためのコンテンツ、ウェブサイト、印刷物を制作、運用する。</p> <p>3. 国際的な文化人材による文化発信・連携 留学生等の国際的文化人材による地域文化資源の取材等を通じて、文化の発信と国際連携活動を実践する。</p> <p>本事業は5カ年の計画を準備している。調査とプログラム開発から出発し、実践を蓄積した後、中間評価を経てプログラムを再構築し、さらに実践を展開させながらモデルの共有を図る、という全体のプランである。活動の重点は、H30:プログラム開発→H31:連携強化、コンテンツの充実、プログラムの実施→H32:イベント開催、プログラム実施、モデルの中間評価→H33:プログラム再構築、モデルの共有化、国際連携推進、自治体協議→H34 モデル共有化、育成プログラムの大学課程への統合、発信・連携事業の大学・自治体共同プロジェクト化と推移する計画である。</p>
<p>区分</p>	<p>(1) 地域文化の発信の核となる美術館・歴史博物館</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ア 美術館・歴史博物館の情報発信、相互連携 □イ ユニークベニューの促進 ■ウ 地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館 ■エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信 <p>(2) あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動</p> <ul style="list-style-type: none"> □ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成 ■イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人材育成プログラムの開発 □ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施 □エ 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業 <p>(3) 新たな機能を創造する美術館・歴史博物館</p> <ul style="list-style-type: none"> □ア 観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動 □イ 文化財の新たな保存管理・活用の手法の開発
<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p>1. 港区で展開する都市文化をその歴史・文化的文脈とともに紹介するイベントの開催</p> <p>(1) 地域の建築とアーカイヴに関するレクチャー(バイリンガル) (建築イベント)</p> <p>(2) 禅文化資料展覧会に関連するレクチャー(バイリンガル) (禅イベント)</p> <p>2. サステイナブルかつ国際的な情報発信のためのプラットフォーム構築</p> <p>(1) 国際発信のためのウェブサイト構築(パイロット版) (国際化ウェブ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ① ウェブサイトによる国際発信 事例調査 WG (ウェブ WG) ② 国際発信のためのウェブサイト(パイロット版)の構築 (ウェブ構築) <p>(2) 国際コミュニティの現状調査(コミュニティ)</p>

	<p>① 港区に所在する大使館へのヒアリング（大使館 H）</p> <p>② 座談会形式による留学生へのヒアリング（留学生 H）</p> <p>3. 国際発信のためのコンテンツ制作と発信</p> <p>(1)文化資源・イベントを紹介するコンテンツの制作(バイリンガル)（コンテンツ制作）</p> <p>① 映像制作（映像制作）</p> <p>② テキストコンテンツの作成とバイリンガル化（テキスト制作）</p> <p>(2)コンテンツの発信（発信）</p> <p>4. 国際発信を担う人材育成プログラムの開発</p> <p>(1)人材育成モデル開発に関する WG（育成 WG）</p> <p>(2)人材育成ワークショップ パイロット版の実施（育成 WS）</p> <p>5. プロジェクトの運営とモデル化</p> <p>(1)プロジェクトの運営と連携の推進（プロジェクト推進）</p> <p>① プロジェクトの運営・報告書の作成（運営）</p> <p>② 新規連携先の開拓（連携）</p> <p>(2)プロジェクトのモデル化（モデル化）</p> <p>① モデル事例検討会議（モデル会議）</p>
<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>2018 年度事業では、NHK 放送博物館(放送文化)、味の素食の文化センター(食文化)、虎屋(和菓子文化)、JCRI(画廊史)、泉岳寺(禅文化)、増上寺(江戸の寺院文化)、草月会(いけばなと前衛芸術)、慶應義塾大学アート・センター(現代芸術)ら、学術活動を背景にした多様な専門性をもつ実行委員会のメンバーが、中核館の主導のもと、一連の活動モデルの構築および実践を行った。</p> <p>本事業の目的は、大きく下記の 4 つである。</p> <p>(1)大学や地域の文化機関が蓄積する学術成果の活用を通じて、「都市文化の物語」を提示し、伝統芸術に関わる文化と、現代芸術に関わる文化を相互に接続する。</p> <p>(2)地域の文化機関や企業と連携し、有形・無形の文化資源のさらなる活用を進めるとともに、「くらしの文化」等これまで認知度の高くなかった文化資源を顕在化する。</p> <p>(3)文化資源や文化資源を巡る活動のサステイナブルな国際発信・連携を実践する。</p> <p>(4)大学の人的リソースを活用し、地域の文化資源の国際発信を担う人材を育成する。</p> <p>5 年計画の初年度である 2018 年度は、モデル構築の基礎をつくるべく「調査・育成」と「成果発信」の 2 領域においてプロトタイプを行った。「調査・育成」領域においては、「情報発信の手法に関する調査・検討」と「国際発信を担う人材育成プログラムの開発」、「成果発信」領域においては、「港区で展開する都市文化をその歴史・文化的文脈とともに紹介するイベントの開催」「サステイナブルかつ国際的な情報発信」「国際的な文化人材による文化発信・連携」に重点的に取り組み、イベントの開催やコンテンツの制作などを実践するだけでなく、次年度における連携の強化や発信力の強化、プログラムのさらなる充実に向けての素地を整えた。</p> <p>以下に、各事業目的ごとの効果を略記する。</p> <p>目的① 伝統文化・現代文化の双方を取り上げるイベントを開催する</p> <p>地域の建築とアーカイブに関するバイリンガル・レクチャーとして、「大学の建築フォーラム:アーカイブとアウトリーチ」、禅文化資料展覧会に関連するバイリンガル・レクチャーとして、「学問・文化プラットフォームとしての寺院:泉岳寺と禅の文化」を企画した。大学の建築フォーラムには、併催した建築プロムナードもあわせてのべ 626 名が参加、泉岳寺と禅の文化には、のべ 63 名(うち外国人 12 名)が参加した。</p> <p>参加者からは、「通常時は案内板を見ることしかできなかったが、それとは比較にならないほどの情報を得ることができた」「公開講座の存在を初めて知ったので、今後聴講したい」「欧米における事例についても聞いてみたい」「はじめて建築に関心を持った」「寺院という場で、僧侶や専門家から知識を得る貴重な経験だった」などのコメントがあり、地域の文化と、文化をめぐる学術成</p>

果を多くの人に伝達するとともに、学術情報を参照することが身近になったという評価が得られた。

目的② 本事業の実施により、文化機関が提供するコンテンツが増加する

プロジェクト・メンバーがそれぞれの領域において、とくに外国人からの需要の高いテキストや文化資源を理解する上で基礎となるテキストを選定し、**8種**のコンテンツを翻訳した。また、大学の建築フォーラムに関連して、大学の建築の一般公開の事例に関する調査を実施し、一般の方が参加可能なイベント等を紹介するテキストを作成した。加えて、地域文化資源を紹介する短編ドキュメンタリー映像を**3件**制作した。

また、人材育成プログラムと連携して、学生と文化資源紹介テキストを共同執筆し、若年層への情報流通を図った。共同執筆されたテキストは、**計 59 件**であり、プロジェクトマガジン(12 記事)、ブログ(20 記事)、Instagram(27 ポスト)として公開されている。

これらの活動により、地域の文化機関による文化資源の多角的活用の端緒をつけることができた。作成されたコンテンツの評価については、次年度以降、国際コミュニティも含めたフィードバックを収集する計画である。

目的③ 国際コミュニティに対する十全な情報流通を実現する

港区は大使館を数多く擁しており、国内随一の国際コミュニティを持つ地域である。しかし、国際コミュニティに対して、各文化機関がそれぞれに情報提供を行うことは必ずしも容易ではない。そのため、本事業では、大使館へのヒアリング、留学生の実態調査を通じて、国際コミュニティに対する情報流通のプラットフォーム構築を試みている。本年は、これらの調査に加えて、ウェブサイトプロトタイプ版の構築、大使館へのプロジェクトとしての広報、自治体と協力した在住外国人コミュニティへの情報提供(英字新聞 Minato Monthly への掲載、外国人向けメールマガジン MIM への配信)、外国人が運営するイベント情報チャンネルへの投稿(東京人文学イベント <https://www.tokyohumanities.org/> など)を実践した。

その結果、各イベントに対し外国人からの問い合わせが増加し、禅文化レクチャーにおいては、**合計 63 名中 12 名**の外国人参加者を得た。

目的④ ワークショップ開催によって人材育成の端緒を付ける

地域文化を国際的に発信する担い手を増やすため、プロジェクトメンバーに総合大学が含まれていることを活かした人材育成プログラムのプロトタイピングを実施した。まず、文化関連人材の育成について先行する TARL へのヒアリングと、慶應義塾大学を中心とした留学生の動向調査を行った。調査内容を踏まえ、「システムデザイン思考を取り入れた、視野拡大のためのワークショップ」「文化機関への取材」「ライティング・セッションを経たコンテンツ制作(共同執筆)」の三部構成とした。プログラムには、様々な学部所属する慶應義塾の学生に加え、各国からの留学生、自治体の職員、地域文化機関の担当者らの参加を得た。参加者数は、当初予定していた 12 名の 4 倍近くとなる 44 名となった。参加者からは「文化の異なる人々と関わり合い、話し合おうとする力が身についた」「I have a better understanding of the tangible and intangible aspects of value within the scope of local art.」とプログラムに対する高い評価を得た。

【事業実績】

「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトの2018年度の活動は、都市文化を紹介するイベントの開催、国際的な情報発信のためのプラットフォーム構築、コンテンツ制作、人材育成プログラムの開発、プロジェクトの運営とモデル化という5事業からなる。本項では、それぞれの活動を「カルナラ！イベントシリーズ」「コミュニティをつなぐ・情報を伝える(連携と発信)」「文化を可視化する(コンテンツ制作)」「カルチュラル・コミュニケーターを育てる(人材育成)」「プロジェクトを育てる(プロジェクト運営とモデル構築)」と題して報告する。

報告の内容をまとめた報告書「都市のカルチュラル・ナラティブ '18」(日英バイリンガル)は、ウェブサイトで閲覧可能である。また、プロジェクトが制作したコンテンツは、SNS やブログといったオンラインメディアでも積極的に公開している。是非ご覧いただきたい。



SNS アカウント: (Instagram, facebook, twitter/@culnarra)



ブログ: (<https://medium.com/@culnarra.interns>)



報告書

「都市のカルチュラル・ナラティブ '18」

プロジェクト 01: カルナラ！イベントシリーズ

「都市のカルチュラル・ナラティブ」は、学術成果の前景化を軸に今昔の文化資源を相互につなぎ、文化の物語(カルチュラル・ナラティブ)を結像することを目指している。このコンセプトを具体的に表現し社会に届けるための一つの装置がカルナラ！イベントシリーズだ。プロジェクトメンバーの多様性を活かし、現代美術・寺院・建築・放送・生け花・食・和菓子といった幅広い主題をフィールドに、港区で展開する都市文化をその歴史的・文化的文脈とともに紹介する講演会、展覧会、ガイドツアー、ワークショップなどの開催を計画している。

本年度は建築と禅の文化に焦点をあて、2つのイベントを企画した。

大学の建築フォーラム：アーカイヴとアウトリーチ

建築をテーマとするイベントは「大学の建築フォーラム：アーカイヴとアウトリーチ」。国内外の建築資料アーカイヴの活動や大学における建築物の公開に関する取り組みを、レクチャーとケース・スタディを通じて共有し議論するフォーラムだ。慶應義塾大学、明治学院大学、学習院大学の担当者に登壇を依頼し、それぞれの大学において建築物の公開がどのように実践されているか、またその試みがどう地域に開かれているかを共有した。また、より大きな枠組みとして建築資料アーカイヴの活動を取り上げ、近現代建築資料館より国内外の建築資料アーカイヴについて紹介をいただいた。

また、フォーラムの開催に合わせて「慶應義塾三田キャンパス建築プロムナード」を開催、三田キャンパスの建築を公開した。建築見学の機会を提供するだけでなく、フォーラムで語られた活動の一つの実現例を示す場ともなった。

来場者からの評価

「建築に興味が出てきて、建物を見る目も変わる気がする。東京文化財ウィークにも参加したい」「建築アーカイヴが市民の財産として公共性を持つという点はより広く認識されていくといい」「各大学の卒業生や関係者以外の一般人・観光者への認識を広めることで、TV 等で知られる建造物以外の学舎建築への新たな歴史観を広める重要性を感じた」など、大学の建築や建築アーカイヴに関する新たな知見と関心を得たとの評価が寄せられている。



大学の建築フォーラムと建築プロムナード

学問・文化プラットフォームとしての寺院：泉岳寺と禪の文化

もう一つのイベントは、禪の学問と文化をテーマとする「学問・文化プラットフォームとしての寺院：泉岳寺と禪の文化」。曹洞宗江戸三学寮に数えられ、禪の学問と文化を深め伝える役割を担ってきた泉岳寺を舞台に、泉岳寺の歴史、禪寺の塔頭文化、禪に関わる造形美術についてのレクチャーを開催した。講師は、牟田賢明氏（泉岳寺知客兼受処主事）と堀川貴司（慶應義塾大学附属研究所 斯道文庫 教授）。泉岳寺は、一般には赤穂義士の墓で知られ、境内には赤穂義士関係の文化財を多数展示する赤穂義士記念館もある。しかし今回の講演では、禪の文化や学問の拠点としての泉岳寺の姿に焦点をあてた。

泉岳寺の歴史については、2012年に駒澤大学小泉雅弘氏が「幕末維新期の泉岳寺」と題した講演を行っている。今回は過去の学術成果の再活用の試みとして、小泉氏の許可を得て、過去の講演記録の書き起こしを元に参考レジュメを編集し、参考文献を参加者の閲覧に供した。

また、イベントシリーズでの成果を広く活用するため、「泉岳寺と禪の文化」での堀川貴司による講演をバイリンガルコンテンツ化し公開している。



泉岳寺でのイベントの様子

来場者からの評価

イベントで実施したアンケートには、「通常時は案内板を見ることしかできなかったが、それとは比較にならないほどの情報を得ることができた」「公開講座の存在を初めて知ったので、今後聴講したい」「欧米における事例についても聞いてみたい」「はじめて建築に関心を持った」「寺院という場で、僧侶や専門家から知識を得る貴重な経験だった」といったコメントが寄せられ、地域の文化と、文化をめぐる学術成果を多くの人に伝達するとともに、学術情報を参照することが身近になったという評価が得られたと考える。

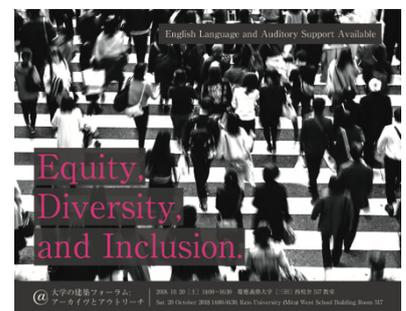


イベントの様子はJ:COMのケーブルテレビでも紹介

東京 2020 プログラムへの参画とアクセシビリティ向上の試み

開催イベントをすべて東京 2020 参画プログラムとして登録し、広く活動の周知を行ったほか、大使館へのプロジェクトとしての広報、自治体と協力した在住外国人コミュニティへの情報提供（英字新聞 Minato Monthly への掲載、外国人向けメールマガジン MIM への配信）、外国人が運営するイベント情報チャンネルへの投稿（東京人文学イベント <https://www.tokyohumanities.org/> など）を実践した。その結果、各イベントに対し外国人からの問い合わせが増加し、禪文化レクチャーにおいては、合計 63 名中 12 名の外国人参加者を得た。

今回のイベントシリーズでは、新しい形での言語サポート（英語）の提供にも取り組んだ。特に、wi-fi や音響等の設備が整わない寺院などの文化施設においてどのように言語サポートを入れるかという課題に取り組み、モバイルアプリケーション等を利用した新しい形での言語サポートの提供を行った。あわせて全般的なアクセシビリティ向上についても検討を行った。



言語サポート紹介チラシ

プロジェクト 02：コミュニティを繋ぐ・情報を伝える（連携と発信）

地域の多様な文化資源を顕在化させ、さまざまなコミュニティにその情報を伝えていくために、本年度は、とくに国際コミュニティと地域文化のつなぎかた、ウェブサイトを通じた情報発信の方法の検討と、地域文化機関との連携の強化に取り組んだ。

国際コミュニティと地域文化をつなぐ

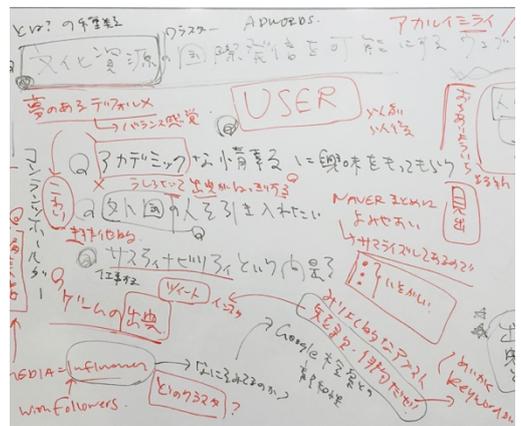
国際コミュニティと地域文化の連結については、まず慶應義塾大学の留学生を出発点に据えて大学における留学生の動向調査を行った。留学生によるインスタグラム取材・編集チーム「慶應インスタクルー」のコーディネータや、留学生向けプログラムの担当者に、留学生を巻き込んだ企画を展開する際に注意している点や留学生の傾向についてヒアリングした。

また、泉岳寺講演会「泉岳寺と禅の文化」終了後、講演会に参加し言語サポートを利用した留学生による座談会を開催。言語サポートへの感想や改善点を共有するとともに、留学生や在住者といった国際的なコミュニティから参加を得るための方法について議論した。

非常に多くの大使館が立地する港区の特性を活かして、大使館へのヒアリングも実施。当初は、在住者コミュニティへの情報提供を主な話題と考えていたが、事前調査を進める中で、地域の日本文化と大使館が文化事業などを通じてもたらす多様な文化とを接続することが文化資源の国際発信に繋がるという認識を得て、文化分野における大使館の活動と地域の連携をヒアリングの中心に据えた。本年度はスペイン大使館、アルゼンチン大使館、オランダ大使館の担当者にヒアリングを行っている。



留学生による座談会



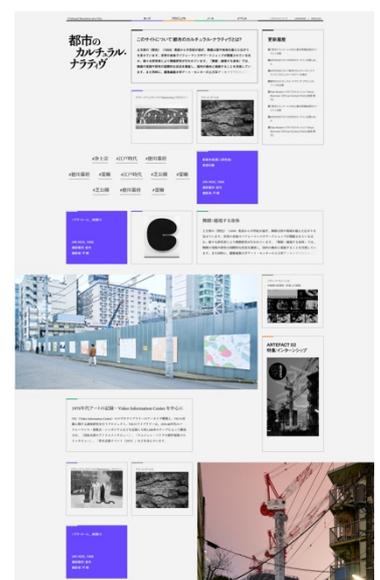
ウェブサイトWGでのディスカッション

ウェブサイトを通じた情報発信の方法の検討：プロトタイプウェブサイト

ウェブサイトプロトタイプ版の構築にも取り組んだ。まず、ワーキンググループにおいて、プロジェクトがウェブサイトを通じて何を・どのように発信していくのかを先行事例を参照しながら検討した。ウェブサイトのユーザー像を「地域の文化について知り、得た知識をもとにみずから語ろうとする人」と設定し、レファレンス機能に重きを置いたプロトタイプ (<http://cul-narra.jp/>) を設計。SNS アカウント (Instagram, facebook, twitter) の試験運用も開始した (アカウント名: @culnarra)。

地域文化機関との連携の強化

また、地域内のつながりを拡大するため、港区で活動するチームと連携の可能性についてディスカッションする機会を持った。国際文化会館とは建築領域での共同イベント開催、六本木アートナイトとは人材育成プログラムやコンテンツ発信における連携、東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムとは海や海洋文化をテーマとした領域横断的なイベントの企画について協議した。



ウェブサイトデザインスタディ

プロジェクト 03: 文化を可視化する (コンテンツ制作)

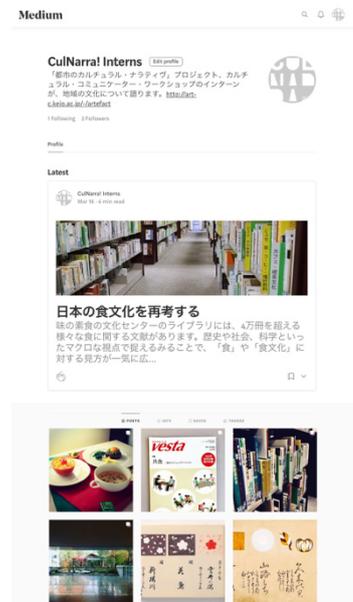
既存の学術成果を活用しながら地域の文化資源を多様なコミュニティに伝えるためには、どのようなコンテンツを準備すべきか。本年度のプロジェクトは、まずテキストと映像の2種を想定し、それぞれに必要なコンテンツを検討するところからスタートした。

地域の文化資源に関するテキスト：翻訳と学生による記事作成

テキストについてプロジェクトメンバーと検討する中で、すでに高い関心を集めている文化資源(たとえば増上寺の徳川家霊廟など)にも意外に英文解説が用意されていない例があることが明らかになった。また、展覧会や講演会などのイベントで特集的に取り上げられたコンテンツが多言語化される一方で、文化資源や関連する活動の基本的な情報の翻訳が進まない例も確認された。そのため、本年度は多言語発信の必要性の高いテキストと基礎情報の翻訳に注力した。

若年層への普及を視野にいれ、人材育成プログラムに参加した学生とともに新たなテキストを執筆することも試みた。作成されたテキストはブログおよびInstagram上で公開している。

コンテンツ制作にあたっては、顧客価値連鎖分析(Customer Value Chain Analysis)を通じて、文化情報が社会の中でどのように伝達されていくかを検討したが、人から人へと伝わってゆくメディア(いわゆる「ロコミ」)の強さを改めて認識した。これはウェブサイトのワーキンググループでの検討結果とも一致する。そのため学生との共同執筆にあたっては、公共性を保ちながらも、漠然と「一般の人」に伝えるのではなく、自分の知人や家族、留学生であれば母国の人々に伝えることを意識した執筆を依頼した。人材育成プログラムとの連携はサステイナブルなコンテンツ制作を実現するためにも重要であり、今後も継続して取り組みたい。



ブログとInstagram

ドキュメンタリー映像で地域文化を紹介する：港画シリーズ

地域文化を紹介する映像については、当初はモバイルでの閲覧を想定し5分という短い尺での制作を想定した。しかしその後の調査によって、モバイルでの動画視聴のボリュームゾーンが「10～30分」であり(NTTドコモ モバイル社会研究所「動画視聴の実態調査 No. 3 [2018-04-16]」)、5分ではCM的に捉えられ文化資源の物語が伝わらない可能性があることが分かった。そのため、文化機関に取材した10-15分程度のドキュメンタリー映像として企画内容を改めて設定した。プロジェクトメンバーの保有するコンテンツからスタートして、現代美術、和菓子、禅という大きなテーマに繋がってゆく構成で、若手の映像作家に監督を依頼した。この試みを通じてコンテンツクリエイターの間にも地域の文化資源に対する関心が広まることを期待している。



泉岳寺撮影



ドキュメンタリー映像「港画」

<https://vimeo.com/showcase/minato-e>

プロジェクト 04：カルチュラル・コミュニケーターを育てる（人材育成）

地域の文化を多様なコミュニティに伝えるためには、言うまでもないことだがその活動を担うための人材が必要だ。現在は、美術館・博物館といったコンテンツホルダーとしての文化機関、出版社などの企業、アート NPO などのコミュニティがそれを担っている。これらの主体による発信を支えていくために、「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトでは、プロジェクトメンバーに総合大学が含まれていることを活かした人材育成プログラムの開発を試みている。

ヒアリング：Tokyo Art Research Lab

プログラムの開発にあたっては、先行事例として、アート・プロジェクトに関わる人材育成を進める TART (Tokyo Art Research Lab) にヒアリングを行った。TART のプログラムのうち「アートプロジェクトを言葉にして伝えよう」「アートプロジェクトの今を共有する」の 2 企画について、プログラムが想定する人材像や育成の効果、ダイバーシティ&アクセシビリティの確保、プログラム自体の普及活動、実施にあたっての課題等について伺い、すでに行われている取り組みに対してこのプロジェクトがどのように接続できるのかを検討した。

カルチュラル・コミュニケーター・ワークショップ

ヒアリング内容の検討を踏まえ、本プロジェクトでは、まず学生を対象にプロトタイピングを行った。育成する人材像は「文化的体験の価値や魅力を広く循環させることのできる人材」と設定し、「カルチュラル・コミュニケーター・ワークショップ (Cultural Communicator Workshop/CCWS)」と題した。プログラムの実践については、報告書内の市川佳世子によるコラム「カルチュラル・コミュニケーターになろう!」に詳しい。

CCWS では、プロトタイプ版ということで様々な試みが行われた。多様なバックグラウンドを持つ学生を集めるため、国際学生寮や留学生が多く履修する講座でのチラシ配布、国際交流系の学生サークルへの情報提供を行ったほか、大学周辺の飲食店にもチラシ掲出を依頼し、地域におけるプログラム周知も試みた。その結果、幅広い学年(学部1年生から博士課程まで)の学生たちが各国(アメリカ、インドネシア、オーストラリア、オランダ、韓国、中国、日本、フランス、ポーランド、モロッコ)から参加した。

プログラムの内容についても、文化機関への取材に加え、鳥谷真佐子(慶應義塾大学システムデザイン・マネジメント研究科 特任講師)を講師に迎え、システム思考とデザイン思考を取り入れたワークショップ形式の講義を行ったり、文化機関への取材の前後にチューターによるミーティングやライティングセッションを開催したりと、アクティブラーニングを念頭においた構成を試みている。



CCWS 第1部講義編/第2部取材編

参加者の感想

「情報発信において、(情報の)発信側も受けて側もそれぞれ得られることがあり、互いにとっての利点を考えつつ目標をたてていくことを意識できるようになった」、「英語に苦手意識を持っていましたが、簡単な英語でもテーマについて話すことが出来たので、少し積極的になれた」、「I feel like I have a better understanding of the tangible and intangible aspects of value within the scope of local art. Because of this, I feel more interested in art, including the local art of Minato ward, because of the opportunities it presents in business, education and cultural communication.」などの感想が寄せられた。

プロジェクト 05：プロジェクトを育てる（プロジェクト運営とモデル構築）

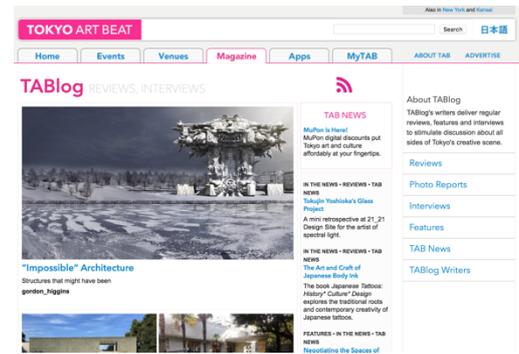
「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトでは、学術情報を軸に、組織の大小や運営母体を問わない柔軟で多様な文化機関の連携を実現する連携モデルを構築し、将来的には、地域や担い手となる組織の種類や規模が異なっても共有・実践可能なミニマム・セットを定義することを目指している。

モデル構築のための調査として、今年度は「大学と地域文化団体の連携」「文化プロジェクトの情報発信」の2つのテーマを設定しモデル構築検討会議を開催した。

モデル検討会議

大学と地域文化団体との連携については、企業-地域(ローカル)-国際(グローバル)と3つのコミュニティを繋ぐコミュニティスペースを運営する SHIBAURA HOUSE の伊東勝氏を迎えてミーティングを実施。SHIBAURA HOUSE の活動、地域コミュニティや大使館との関わりについて伺う中で、双方の専門性をソフト・ハードの両面で交換できるような企画を検討してはどうか、というアイデアもでた。特にハード面でのコラボレーションはユニークベニューとの親和性も高く、今後具体的に検討していきたいと考えている。

文化プロジェクトの情報発信については、東京のアートイベント情報のプラットフォームとして機能している Tokyo Art Beat (TAB) 諸岡なつき氏に依頼し、地域文化資源の情報やプロジェクトの活動発信に関するモデルについて検討を行った。ミーティングでは、TAB の編集体制や編集方針、バイリンガルでの情報提供について、また寺院などいわゆる公開施設ではない場所でのイベントの扱いなどが話題となった。また、掲載コンテンツの Creative Commons 対応について共同する可能性についても検討された。



Tokyo Art Beat ウェブサイト

プロジェクト紹介

また、港区が主催するシンポジウム等において、プロジェクトの紹介を積極的に行った。港区内で文化芸術に関わる活動を行う主体で構成された「港区文化芸術ネットワーク会議」にて「都市のカルチュラル・ナラティブと ARTEFACT:リサーチをキーワードとする文化ネットワーク」と題して活動を報告したほか、港区が主催するシンポジウム「世界に開かれた「文化の港」を目指して」のトークセッションにて、プロジェクトの事例紹介と、区内で活動する文化団体とのディスカッションを行った。

シンポジウムの内容、またプロジェクトの活動については、港区発行の「文化芸術のチカラ∞ガイドブック」に特集として取り上げられている。



シンポジウム/文化芸術のチカラガイドブック

プロジェクト運営

プロジェクト運営については、プロジェクトメンバー間での情報共有の仕組みにまだ工夫の余地がありそうだ。プロジェクトは、中核館における定例企画会議、プロジェクトメンバー全員が出席する全体会議と、メーリングリストでの連絡によって運営されている。プロジェクトの実施に関わる基本的な情報共有は達成されているが、ちょっとしたアイデアやノウハウの共有など、よりカジュアルなコミュニケーションを生み出すための仕掛けを用意できないか、今後検討してゆきたい。